

遠藤文学をめぐるヴァン・C・ゲッセル氏と加藤宗哉氏との往復書簡

メール

2019年8月～2021年3月

遠藤文学の翻訳者ゲッセル氏から本クラブの加藤氏へ何通かの興味深いメールが送られてきたので、皆様にご紹介します。

「掲載に当って」 ヴァン・C・ゲッセル (ブリカム・ヤング大学 日本現代文学学科名誉教授) 2021/3/21

拙者が加藤宗哉先生に送ったメールがこういう形で公に晒されて周作クラブの皆さまのお目障りとなることを、誠に申し訳なく思います。この企画を提案したのが、決して私でないことを皆さまにご理解いただければ幸いです。とは言っても、遠藤周作先生の英訳の仕事に長いあいだ携わることの出来た者として、遠藤先生のお弟子さんである加藤先生との文通を皆さまに読んでいただけることには、この上ない嬉しさが伴います。シカシですね、この文面に絶対、責任は持ちませんよ。

「旭日中綬章、祝電にかえて」 加藤宗哉

2019/8/24



ヴァン・ゲッセル先生の長崎でのお祝いの会にうかがえず、どうかお赦しください。本当はお目にかかって、いつものジョークや、ユーモアに溢れたお話ぶりに接したかったのですが……。常づね私は、「ゲッセル先生と遠藤先生とは、ユーモアのタイプ、あるいは感覚が似ている」と思ってきました。兄弟か、悪童仲間のように、おどける言葉が似ている。

先日、ゲッセル先生のエッセイ「翻訳家が見る『侍』」を読み返しておりましたら、こんな一節に行き当たりました。『侍』の英語版を一刻も早く出したいという版元の意図で、翻訳者であるゲッセル先生のもとへ、遠藤先生の生原稿がコピーで届けられたといえます。四百字詰め原稿用紙に秘書の方が清書した上へ、遠藤周作の訂正や書き込みがある。

この日から、苦闘の日々がはじまったそうですね。ゲッセル先生はこうお書きになっています。

「原稿用紙のマス目や余白を埋めていた、すごく小さい、ギョウ虫の形をしたような文字と格闘しなければならなかった」

いくら目の肥えた遠藤文学の理解者とは言え、その判読のご苦労は察して余りあります。

しかし、そのとき、私はふと思い出しました。かつて私が「三田文学」を手伝った学生時代、遠藤編集長が酒に酔えば必ずと言っていいほど口にしていた言葉「わからんかな。君たちには、ギョウ虫の哀しみが」。何度、聞いたか知れませんが、「ギョウ虫」という言葉に、歌うような哀しみがこめられていたのです。

その同じニュアンスをゲッセル先生のエッセイに発見し、私は驚くとともに感嘆しました。やはり作家と翻訳家は、こんなふうにしてもと、どこかで結びあっているものなのだ、と。

「感謝します」 ヴァン・C・ゲッセル

2019/9/2

蒸し暑い日本を去って三日しか経っていないのですが、時差ボケや日付変更線を越えたせいか、日本での二週間は遠い夢のような感じがしています。それにしても、東京では私のためにわざわざ祝いの会を開いてくださり、多くの親切な方たちに囲まれたことが心に深く刻まれています。

もう一つのお礼を申し上げたいと思います。長崎で開かれた2回目のお祝いパーティが開かれた時、山根道公先生が加藤先生のコメントを読み上げてくれました。その中で、私と遠藤先生がもしかすると悪童仲間とか、ゲッセルも遠藤も「ギョウ虫」という言葉をまったく違った場面で使ったとか、拙者のことをあの偉大な小説家と並べてくださったことは、この上ない光栄でした。「祝電にかえて」と題されたお言葉を一生大事にするつもりです。どうか、今後とも御達者で、幸せに満ち満ちた人生を送られますように。

「令和元年おめでとうございます」 ヴァン・C・ゲッセル

2019/5/17

新しい年号を迎えると、この歳でやはり自分の人生を振り返ってみる人が多いでしょう。私もその一人です。加藤先生と年齢がそんなに違うわけではない（私も昭和生まれで、先生と同様戦後派あるいは戦無派と呼び得る者です）が、時代の変遷とは別に、先生と私（注：漱石の「こころ」と何の関係もない！）を固く結びつけているのは、遠藤周作先生への

尊敬ですね。私は来年の夏リタイヤする予定ですが、その後も遠藤文学の英訳や研究を体力（と脳力！）のある限り続けていくつもりです。

ところで、スコセッシ監督の映画「沈黙—サイレンス」の封切りが2年半ほど前だったとは…。ちょっと考えられませんね。私もその小説と映画の比較や、映画がどれほど小説に忠実であるかというテーマで講演をしたり、文章を書いたりしています。映画の興行収入は、アメリカ7億円、日本5億円だったようですが、結局、現代人は信仰の問題に興味を失いつつあるということを意味しているのでしょうか。そうであれば悲しい現象ですね。今のアメリカは、トランプ・ダンブとでも言える、非常に荒っぽい国となっているように思われます。政治家（性治家?）同士の侮蔑が国民へと精神の病気のように伝染してきていると言わねばなりません。……ずいぶんくだらない説教になってしまったなあ！ ごめんなさい。

「お久しぶりです」 ヴァン・C・ゲッセル

2020/10/18

大変ご無沙汰しております。こちらでは秋の日和が続いている中、4月に受けた腰の手術からの回復が非常にノロノロなのですが、先生の方ではコロナウイルス禍「にも負けず」というところでしょうか。

前にも申し上げましたが、私は7月1日に退職（リタイヤ）をしました。大学のオフィスから自宅に運んできた数多くの書籍の半分以上は、なぜか遠藤周作関係の本です。今でも勉強不足という気持ちで毎日、本を読んでもばかりです。

今、伺いたいことがふたつあります。

ひとつ目は、遠藤先生の“翻訳されるべき小説”についてです。先月、『女の一生・サチ子の場合』が私の英訳で刊行されました。数えれば、遠藤作品で私が訳した本はこれで8冊になります（長編小説6つ、短編集2つ）。これからもうひとつの作品を翻訳するか、それともしばらく翻訳の仕事を休むか、と迷っています。『死海のほとり』が英訳されればいいという声を時々聞きますが、その小説を訳すに必要なエネルギーが今の私にはないと感じています。そこで、ただ今『満潮の時刻』を再読しています。評論家の論文を読めば、長い間刊行されなかったその作品にはいろいろな欠点があるようですが、その小説について、どうお考えでしょうか。別にそれをこれから翻訳しようと決心したわけではないけれども、まず先生のご意見を聞いた上でこれからの仕事を考察してみたいと思っています。どうかご意見を聞かせていただけないでしょうか。

もうひとつ、私は今、マーク・ウイリアムズと共に『日本のキリスト教作家ハンドブック』を編集している最中です。良いか悪いか、遠藤周作論を書くことになっているのが、この解せないゲッセルです。その論文を書きながら、昔どこかで読んだと、臆げながら記憶しているひとつの事件について、加藤先生にお尋ねしたいと思います。



(第83号)

2021年5月25日発行



◆主な記事◆

お知らせ欄	周作クラブ長崎便り	町田文学館講演報告	私が選ぶ遠藤周作の作品	遠藤周作事典発行	連載・樹座30年⑨	ゲッセル氏とのメール1
8	7	6	5	5	4	2
面	面	面	面	面	面	面

1994年、ノーベル文学賞の発表が今夜だという日に、受賞者がエンドウだという確度が非常に高かったので、日本の新聞記者たちが遠藤先生の家の前に集まって、発表があればすぐさま遠藤先生のコメントを取る予定だったが、思いがけなく「受賞者は大江健三郎」と発表があったので、記者たちが大江のところへ駆けつける前に、行きがかり上、遠藤先生からの一言を要求した—という噂です。その話によれば、遠藤先生は上手いことを言ったようです。つまり、大江健三郎が「神のない世」をよく書いているというような発言だったようです。どうですか。加藤先生はその話の真否を必ずご存知だと思いますので教えてください。架空の話なら、もちろん私の論文には書きません。

では、長くなりましたし、先生にお願いしたことがあまりに多いから、ここで止めましょう。ご健康、お仕事のご成功を心よりお祈りいたします。

「遅くなりました」 加藤宗哉

2020/10/23

何かたいへん難しい宿題をいただいたようで、ついで返信が遅れてしまいました。しかしそれよりも、ご体調の回復が「ノロノロ」とのことが気になります。一刻も早い完全回復を心から祈っています。

おかげさまで当方は無事にこのコロナ禍の世界を過ごしています。たしかに、授業や講座のスタイルも変ってきましたが、新しいことも覚える、というプラス面にも遭遇したようです。いまは半ば愉しみつつ、新しい交流の形と格闘しています。

『女の一生・サチ子の場合』のご翻訳ご刊行、おめでとうございます（しかし全部で8冊とは、本当にこれまでご苦労さまでした。もっとも、冊数はまだまだ増えるのでしょうか）。

新しい翻訳のご構想、たしかに『満潮の時刻』はいろいろな問題を抱えています。『沈黙』を理解するためにも必要な小説だと思います。個人的には、つまり遠藤文学愛好者としては、好きな作品の一つです。遠藤文学は『沈黙』から始まったと私は敢えて公言しているのですが、その出発点を理解するうえで30代後半の長い闘病と踏絵の体験は欠くことのできないものです。ゆえに『満潮の時刻』の英訳本の刊行は嬉しいものの、ただ、採算が取れるのかと余計な心配もしてしまいます。※情報としてお伝えしますと、こんど遠藤周作未発表小説『影に対して』が発見されたことはご存じだと思いますが（雑誌「三田文学」にすでに掲載）、それが今月中には新潮社から『影に対して一母をめぐる物語』（短編集）として刊行されます。こういう本が翻訳されるのも嬉しい、と今ふと思ったのですが。

さて、ノーベル賞発表について。あの日のことは、遠藤先生から直後に聞きました。たしかに新聞何社かが遠藤邸で発表を待っていて、受賞作がきまったという報が入ったその時……。遠藤「他の記者はこっちの気持ちをおもんばかって俯いて黙ってこんだのだが、朝日の記者だけが急に、“大江さんの受賞についてどう思われますか”と訊いてきやがった（乱暴な言葉で申し訳ないのですが、ここは強く記憶に残っているのです）。……そう苦笑していました、というか素直に腹を立てていました。そのあとに話したという大江評はお書きになっておられた通りです。遠藤先生が「大江の小説を読むと、あれはもうクリスチャンだな」と晩年にぼそっと言っていたのを思い出します。もちろん嘘なんでしょうが。

以上、あまりお役に立たなかったと思いますが、お許しください。明後日から、長崎の遠藤文学館に、資料確認のために三日ほど、行ってきます。どうぞ、くれぐれもご健勝でお過ごしください。

「またゲッセルか」 ヴァン・C・ゲッセル

2020/10/24

ご返信、大変嬉しく拝読しました。加藤先生と一年以上も会っていないのは、本当に残念に思います。

この前のメールで申し上げることを忘れていましたが（ご安心下さい。難しい宿題にはなりません！）、数年前、私が町田の文学館で『侍』について拙い講演をした折、先生はわざわざ来てくださいました。そして講演後のQ&Aの時間に「難しい」質問を2、3なされたことを覚えておられるでしょうか。ひとつは、『侍』の原文に質問してくる「しらどり」という単語をどう英訳したかという質問でした。それに対して、私が緊張のあまり、英訳本をドギマギしつつ調べたのですが「しらどり」の英訳を見つけることができず、単に“white birds”と訳したかな」といい加減に答えてしまいました。それを聞いて、先生はガッカリなさったに違いないと思います。その後、あの時の講演を思い出した際に、顔が赤くなって恥ずかしい気持がまた蘇ってきて、私を無残に悩ませています。

が、最近インターネットで行われた『侍』についてのシンポジウムに出席を頼まれ、先日、二回にわたって話をしました。それでいつかの投げやりな回答を思い出し、英訳を真面目に調べることにしました。すると、なんと“white birds”という馬鹿ばかしい英訳じゃなくて、“white swans”や、ただの“swans”という訳語を嬉しく見つけました。それをぜひとも私の町田での恥を目撃した先生にお知らせしなければいけない、と思った次第です。



若き日のゲッセル夫妻と遠藤先生

今度の英訳に対して貴重なご意見、誠に感謝しています。『満潮の時刻』にするかどうかまだ決めていないのですが、先生のおっしゃる通り、確かに『沈黙』を理解するには重大な作品だと思いますが、教えて下さった今回刊行される『影に対して一母をめぐる物語』のニュース、大変興味を覚えました。それをぜひ読ませていただきたいと思います。英訳にはちょうどいいかもしれませんね。

ノーベル賞の出来事。先生が遠藤先生から直接お聞きになった話はなかなか面白いです。私が聞いた噂はやはり出鱈目ではなかったようですね。その話の内容を丁寧に説明してくださって、ありがとうございました。

では、長崎での資料確認がうまくいきますように。先生もお達者でいらしてください。

「ほら吹きのご報告」 ヴァン・C・ゲッセル

2020/12/10

長い間ご無沙汰して申し訳ありません。

終りがなさそうなコロナ禍の中、お元気で活躍でしょうか。こちらはほとんど外出せずに妻と暮らしているので、彼女は私のこの顔を見るのも既にイヤになっていると思われる。

リタイアメントに入ってから、どうも、さらに忙しくなった感じ。特に時間をかけた仕事は、マーク・ウイリアムズと共編している『日本のキリスト教作家ハンドブック』に収録する「遠藤周作」の長〜い論文（英字で16,500ワードほど。日本語で82,000字）を書き上げることでした。つい最近完成したけれども、読まれるに値するかどうかまだ疑問に思っています。マーク君に読んでもらったけれども、彼は私の教え子ですから、仮にその論文を褒めてくれても信用してはいけません。

ところで遠藤先生の範に倣って、「ほら吹き遠藤」じゃなくて「ほら吹きヴァン」のデバン（デヴァン？）です。先日コロンビア大学に属しているドナルド・キーン・センターから連絡がありました。同センターでは年に一回、日本文学作品の最も優秀な英訳を作った訳者にLINDSLEY AND MASAO MIYOSHI PRIZEという賞が授与されるのですが、もうひとつの特別な賞、すなわち滅多に与えられることのない「生涯功労賞」というのもあって、なにかの間違いでその賞がVan C. Gesselなる者に授与されることになっております。「生涯」という言葉を聞くと、なぜか「これでお前の最期が来たぞ」という感じがしないでもないのですが……。それに、かのゲッセルじゃなくて、実際に賞を受けるべき人物の方がとても可哀想に思います。

まあ、兎も角もコロナ奴のお陰で授賞式はしないことになっていきますので、この9ヶ月間、変わりなくただ家に閉じ籠って、リクライニング・チェアに傷んだ腰をおろしながらテレビを見たり居眠りしたり、静かにワイフと受賞を祝うことにします。

話は変わりますが、先生が紹介して下さった最近刊行の『影に対して一母をめぐる物語』を手に入れ読みました。遠藤先生が母親やご両親の関係を切り扱う小説はそんなに多くはないけれども、そのお母様の影響があまりにも強かったので、この中編・短編集は中々に興味深いですね。今度の英訳はこれにしようかなと今考えています。いずれは龍之介さんと相談した上で決めなければなりません。彼がうんと言わなければ困ります。

取り敢えず加藤先生はこの酷いウイルス時代を無事に生き抜かれますようにお祈りいたします。